滑稽喩図會 前編 下

八遠13
870
2

遠13
門
970
巻 2

上

○素はくの京紙を用ひて

ある池に

いろく

やまよ

浮木

と云つけさ

ゐ

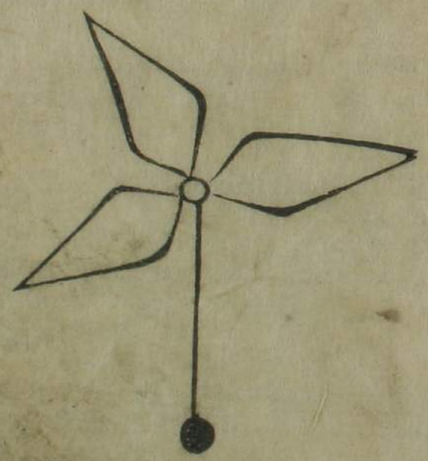
ゐやそしてぐもと庭が

ふういさういろ

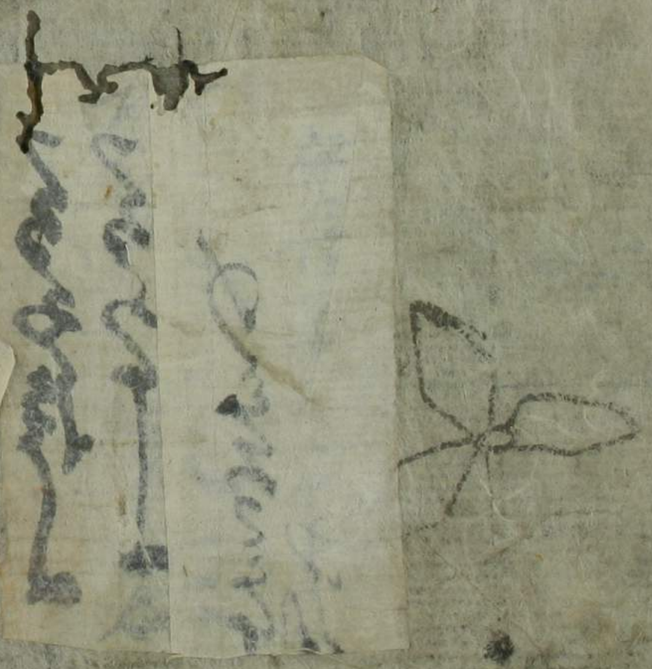
ちづをうやう

おろ〳〵車に拵て

羽根



大正三年十月廿八日



上〻

○京の帆柱

うのような二重橋の

親仁つい横町へもとゝいべ

むすこされ枝とついて

もゝきされと出ゼバ

あ老るおいてはもらぐ〻や

追風

上〻

○渦巻

甲玄伯さんしつるうり橋の下ま

口このうり塊つぐ出来まゝく

お狐〻〻〻

上〻

○ち児の欲食

こちの食太郎ハ物を

くいさぐるうつゝ古屋ふ

かつさまんぢうと○ひろ

やつゝゝぢきよくいおつく

又せがむうゝうんどハ

二つ○○やつゝ泣とうくゝく

おうゝよ泣つゝ弟ぢうゝとうどう

○○○おつ一時食おつゝぐうでも

芸屋ふぐや

癖気さい

上〻ち

○汝家の勢力

門徒家ハ結構な家ふ

ヒ夜西六除ハ大坂の藩中が

仕法ぐ法むうゝ○戸ぐ

ぢうちうゝゝと○戸

ちちうゝと○戸ぐうかゝ

○○うゝ○戸でうう

○○

まゝぐ伺とゝひりのぢやないい

ゝ言葉うよ結構ふ

くやうまくいろふ

九曜

佐芸

上々

○きつねのろ我

いちのうへ毎年狐が四足で

まゐりますさいうへくらい

まゐりやうや狐福でむ

じやさいうへふ禁令と

建て祭るがりのいうへ四へよ

よくく

うの建さう

いつ入ると十丈いつて

上々

○下谷の考

ごうしやは晉清ハ大うへ形まゐうた板で

ムり絵庭昔の清ハ板でうへムります

先生ハ京相と清逸なさう

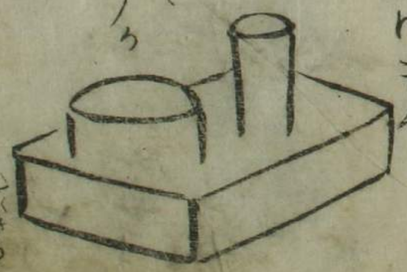
さうなが何しそにらん下され

うの仏庭く古き

ムりますすぐ玄蕃つふな

ふ板ア汚ムります丸い回くもいぐなものと四方で

加板ふ投くまくまくまあ



一上くさちうへて四逸うきしまセ

一唱上く

○世帯の兵者

威風堂々と〜〜る兵者右ゑハ[redacted]

拍とちたゑハ大れ鉄弓と〜〜

小紙すくさき大ゑれつとハ文

〜ふおつぴら〜やいな辰の

一天ふ口ち〜〜〜と

〜を来て火花とち〜

〜〜戦ふもの世帯平記のうち四天王の

注一と呼つる火おの治紀金平じゃ

拍に

亀

上く

○賞美の号名

子切屋れお梅さんハ一人娘なれバ親の

秘蔵する名じゃもづ笑顔が一ぐんさて

徒蔵が一ぐんぐ気立が一

ふ垂すぐ〜紅ゑるふ

〜ぶ〜〜点のうちてが

ない目へ却れ町ぐゑる

人毎ゑうこな

玉

玉〜〜〜〜じゃ

ゑゑいかあ

上〜

○耳長人

ちうい丁寧らしぬうさぎが
あるが所為あ道が化けやうか
を来の名人じやつがつぐ
金紙あふするが賞うまうんう

うやと化けじやかいさいが
まちつと面白さげるさん
きあ紙朱ふまうんう

さやうまあ先へ

直

振つけく見ようまうや

上〜

○酒のいづく

を江の湖ハ琵琶湖法師
うびとなりじやの
なうとろが六月四人
あうくつうう山嚴石が
あつて
柳子瓶茶う
まあ〜法利とうえや
ふやル
逃るけものうつ〜ぎや

一唱上〻

○玄奈の玉法

白石のお姫と殿さんと先後〻ぢんな
うがいとまま〻ぢんな　かんざ〻とやつてを
結ぶ小下女とまゐる狂〻
付て一とひぢいれ〻〻ろの
お姫がおきの手とつくぢんか口
ア〻と咨中と二つ〻〻〻ぢつなまりの
ありがさふ首節〻〻ぞつと〻〻〻ぢな命め

命

上

○各畜の算陰

ひさうな火徒ふ侠久と
波〻〻〻猫つとちんが

おのうな
鰹の印状

あぶつ〻〻ぢるとぢくいて
生抜ハろ〻ひ姫未人ぢや
いなのうすい食るものぢや
なんふ搾るものぢやといへバ
いや何も幼色づくぢや

上々吉切○芭蕉の秋風

口は禍の門舌は禍の根金人の銘に曰く

言葉多きなりしをいとく

こといらのじやつい一はかどな

いとがたがいて云つのるとく

負まいとする口へ入れぬ山が

あがつく（このやうふるとやうあいさつが

まんすつ）うと入て治つるえいかれさ口舌とに

かくじや拘るがいとく（うちぐんめんが勝じや

内陽

三歎上上切

○源氏の巻出

しなるちる御殿へ上つるさが金多つとい上作り

すく白書流黒書流桐壷のうちよ竹川て

垣と結花の根うとはき柱のふしぶつぐ

源氏の間が大とく六十四畳そし

ひろるとうと奥向の支ハ

あまりの広ていえぬといへば

こうま私てかくすハ仕ぬじや

ないこ（さあかるふ云へば（まあこの景おとものじや

香

上々

○蘭紅の入津

毛紅と見てさぐ

このうへなる

ものじゃ●こんか穴がある

石火矢を打口じゃさうな

入津するときハ

やうないりをおろし首ハ

堺へまぐ来さうなまぐ

くるやうとをく

彼方

とが出来まくいか

上々吉

○笑新の往ぜ

来新ろう始て活花へ下つる女中往来へ連て

まのる宮仕ぶ沖の

糸ぶを泳ぎ

一八さんざつと

白いものろさんを見つる

あれハ何て、まんと云ハ

あれハ和垣陰生ぶかして

女中ハふ紬を帆

上

○橋をば白土

そうかもつとも彼橋杭のない屋形橋の

ふいて水と見れば大川の

水板にうつる迫〳〵出てくる

ろうやたまゝぬと色を濃の

淺黒橋姫を横絵〳〵

なつく〳〵の内ん中〳〵

ふる絵紙と一じんとおろすやいろ

雨

三歎極上々○

鬼の目小洞

東ゑい陳ろう焼なさい〳〵迫〳〵枝木を

法圓〳〵〳〵そろる本洞の古衣を着〳〵

加賀紙中ひろう〳〵〳〵〳〵

金をゑか来るぶさあつ〳〵

面白ふる日○こんな笠と

うづくしうゑな蓑ぬきて

三人〳〵〳〵

こんな九太〳〵

そりや大方皆丹波ゝやあろう

上々

○ 鯛食の云ふ 吉

接肉 おらあけるぞ 鯛らちり
来さあくろ ぐつと食つるぞ
てめへどうぞ おらあなは
くつさ隠じや紙へ江戸子
いつくくに三友武茶と
六百おくく うう胆根の
生くさのと買く食さるゆぐかくあ
なふ 飛じぶるゆとふ

上々吉

しるし 都へ出つく清水坂とおりて
足まくさぶちくくの古渦やゆき辛と
するのと足く石まくさぶ ぬか
くのじやまづ 凸 このうな
くこのうく古とぬるつ手
ひか ○ このうな車がかる
見と巴くきくるくちふまてとろい仕業
こかれ意くくくくくる
何でもあ ふいちぶと足つる 株 兎

上〻

○顔見世の式

劇場ハ何下でも新見世で
張ぶ　看ぐやその張ぶ
掛義ぶ京大坂ハ古ひ
今変化狐と人うらふて
き人づ立く江戸ノ
言葉や菊丸白猿この
三人、　き〻ふバ
おちやいぶついさう

東郷

上〻吉

○ゆ免れ言葉

夕べ狐と藤ろうふふ〻ぎや
し狐か　富士の山を見ると思へこれハ
いつもらうの山れるわがひらひ思へ
まあ〻ふく見ふと思ふ町
ゆく〻禁へづうとすづおちる
ふ〻ふ〻ふら目ぶ見ふる
そ〻〻今切ぶさしふな面と拾ふる
やつぱり夕べの義ぶ分ふ
おふる稲ぶやたる

角おぢハ
ちゑ
なるかや
蝸牛

湯殿の影絵初篇終

時成画